

昨年、昌子姉さんが亡くなっ

た日も旧知の今西誠司氏には電  
話で帰れない事情を説明し、親  
戚への伝言を頼んだ。「よか  
す。わたしからみんなにはよう  
と説明しとくですたい」。あの

人のことだ、ようと説明してく  
れたはずですたい。次の松浦公  
演初日の夜に飲み会を約束した  
のはもちろんである。「松浦は  
サバがうまか時期ですたい」。  
その日は旬のサバを着にして  
話が弾むはずである。

このエッセーを書くようにな  
って、土曜日付西日本新聞の工  
ツセーの掲載紙が月曜日にはわ  
が家に届く。3日遅れである。  
昔、「3日遅れの古新聞 読む  
気があつたら買つとくれ」とい  
う歌があつた。駅で引き揚げの  
人に売る新聞だったのか。違つ

組を見つけると、「ヤリとする。  
「長崎くんち奉納踊総集編」。  
これは東京のテレビでは絶対に  
見られない番組である。長崎市  
や平戸市、松浦市のおくやみの  
欄は「もしかしたら知っている  
人ではないか」と目を皿にして  
読む。

名や名前がはつきりとはわから  
ない。わたしの世代は新聞を読  
むのが癖になつていて世代であ  
る。旅先の旅館でも朝はまず新  
聞である。松浦で読むスポーツ  
新聞には、東京では3面の隅つ  
こぐらいでしか取り上げられな  
い九州ゆかりのプロ野球チーム

昔は上京と言つた。上京もいま  
やほとんど死語か。飛行機に1  
時間半も乗れば九州の空であ  
る。東京に出張する人も日帰り  
だそうである。  
ただ、「東京松浦会」の席に  
はあこの干物とスポかまほこだ  
けは欠かさず置いてある。「あ  
この干物は新聞紙で包んでた  
いてほぐしてから食つた」とだ  
れもが懐かしそうに言う。そう  
だ、懐かしがる年になつた人が  
ふるさと会に参加する。西日本  
新聞の春秋の欄や読者の寄稿欄  
も繰り返し読む。寄稿欄も知っ  
ている人が書いたのではないか  
と、これも目を皿にする。地方  
紙には故郷の香りがする。週に  
1回、故郷の香りをたっぷりと  
かいでいる。(松浦市出身)

## 週1回故郷の香り

かな。都はるみさんの歌に「3  
日遅れの便りを受けて 船が行  
く行く波浮港」といった歌もあ  
つた。波浮の港にも3日遅れの  
新聞が着いた時代があつた。

西日本新聞はなかなか関東で  
は読めない。国立図書館にでも  
行けば読めるのかもしれない  
が、わざわざ新聞を読み国立  
図書館までは通えない。家内の

が、1面トップの見出しを飾つ  
ていて嬉しくなる。  
近頃は、よく「東京松浦会」  
にも出席させていただく。参加  
者は圧倒的に50代から80代であ  
る。松浦の昔話に花が咲く。東  
京に出て来たばかりの頃は突っ  
走るのて精いっぱいであった。

送られてきた西日本新聞は1  
面から36面のテレビ欄まで丁寧  
に読む。東京ではやってない番  
組を見つけると、「ヤリとする。  
「長崎くんち奉納踊総集編」。  
これは東京のテレビでは絶対に  
見られない番組である。長崎市  
や平戸市、松浦市のおくやみの  
欄は「もしかしたら知っている  
人ではないか」と目を皿にして  
読む。

故郷の知覧では南日本新聞を読  
むがそれほどの親近感湧かな  
い。それはそつだ、鹿児島は地  
走るのて精いっぱいであった。

故郷の知覧では南日本新聞を読  
むがそれほどの親近感湧かな  
い。それはそつだ、鹿児島は地  
走るのて精いっぱいであった。

故郷の知覧では南日本新聞を読  
むがそれほどの親近感湧かな  
い。それはそつだ、鹿児島は地  
走るのて精いっぱいであった。